

## 『一休和尚いろは歌』小考

小野 恭靖

日本・アジア言語文化講座

(二〇〇五年八月二十四日 受付)

短歌形式の文学のひとつに道歌と呼ばれるものがある。道歌は宗教的または道徳的な教訓を読み込んだ和歌であるが、むしろ狂歌に近い性格を持つ場合も多いと言える。筆者は道歌に関心を持ち、既に『道歌心の策』や『道歌百人一首麓枝折』についての論考を発表したが、本稿では一休和尚に仮託された道歌集のひとつで従来顧みられることのなかった『一休和尚いろは歌』を紹介し、位置付けることを目的とする。

キーワード…文学、道歌、一休、いろは歌、『一休和尚いろは歌』

### はじめに

短歌形式の文学のひとつに道歌と呼ばれるものがある。道歌は宗教的または道徳的な教訓を読み込んだ和歌であるが、むしろ狂歌に近い性格を持つ場合も多いと言える。筆者は道歌に関心を持ち、既に『道歌心の策』や『道歌百人一首麓枝折』についての論考を発表したが、本稿では一休和尚に仮託された道歌集のひとつで従来顧みられることのなかった『一休和尚いろは歌』を紹介し、位置付けることを目的とする。

### 一 『一休和尚いろは歌』翻刻

本稿で紹介する『一休和尚いろは歌』は従来ほとんど顧みられることのない道歌資料であった。『国書総目録』には類似する外題で駒澤大学所蔵版本一本のみがわずかに掲載される。また、『古典籍総合目録』には登録がない。一方、多くの一休仮託の道歌集を集成した画期的な書である禅文化研究所編の『一休道歌 三十一文字の法の歌』(平成9年)の集成対象からも漏れている。後述するが、ここに紹介する『一休和尚いろは歌』には『一休道歌 三十一文字の法の歌』と重複する歌十六首に対して、重複しない道歌、つまり他の一休仮託道歌集には見られない単独の道歌を三十二首と、ちょうど倍の数だけ指摘することができ。いわばこれら三十二首は一休道歌の新出歌ということになり、きわめて貴重な資料であることが確認できるのである。

本稿ではまず、架蔵本『一休和尚いろは歌』を翻刻紹介する。架蔵本は表裏の表紙を除く本文全七丁からなる小規模な版本で、大きさも縦一八・五糎、横一二・三糎からなる小冊子である。表紙は錦絵摺りで上部の雲形部分に『一休和尚いろは歌』という外題が記されている。絵には二人の人物が描かれるが、向かって右には播粉木を挿した状態

の描鉢と俎板を前に座る小坊主が置かれる。小坊主は左に位置する杖を突いて立つ老法師の方に顔を向け、左手には大きな魚を捧げ持つ。魚は寺院においては食してはならないものであるから、魚を料理しようとするこの構図は戒を破る行為に他ならない。そのためか老法師は厳しい顔をして小坊主を睨んでいる。この小坊主こそが江戸期に行われた頓智小坊主一休像と考えられる。一休を頓智小坊主とするのは明らかに後代の仮託説話であるが、本書の表紙絵はそれを反映しているものと言える。次に、表紙見返しに挿絵は鎧兜に身を包んだ四人の武將と、小姓のような一人の若い男の合計五人が描かれる。

本文第一丁表以下は挿絵部分を除いて、縦に野線が引かれ、それぞれ半丁（一頁）分が五つの齣で区切られる。第二丁表は右端に「一休和尚道哥いろは歌」という内題が置かれ、以下「い」から「に」の音で始まる道歌四首が並べられる。第一丁裏は「ほ」から「り」の音で始まる道歌五首が、第二丁表には「ぬ」から「か」の音で始まる道歌五首がそれぞれ並べられる。続く第二丁裏は挿絵で上半分には「水戸黄門公御示之四」という教訓が高札の中に記され、その周りにも教訓的な文言が置かれている。下段は中央に田植えをする六人の農民の姿が描かれ、その右には「忠」「信」にかかわる道歌二首が、左には「礼」「楽」にかかわる道歌二首が見える。第三丁表には「よ」から「つ」で始まる道歌五首、第三丁裏には「ね」から「う」で始まる道歌五首、第四丁表には「る」から「や」で始まる道歌五首がそれぞれ並べられる。第四丁裏から第五丁表は見開きの挿絵が置かれる。挿絵の内容は有名な橋弁慶図である。長刀を持った弁慶と橋の上を大きく跳ね上がる牛若丸というおなじみの構図が採られている。そして、第五丁裏には「ま」から「え」で始まる道歌五首、第六丁表には「て」から「ゆ」で始まる道歌五首、第六丁裏には「め」から「ひ」で始まる道歌五首がそれぞれ並べられる。第七丁表は挿絵である。蓮池の岸

に佇む鶴が描かれるが、上部には「ゆだんすな根は泥ぼうの蓮のはなのられぬくむさとのられぬ」という道歌が画賛のように書き入れられる。第七丁裏は「も」から「す」までと「きやう（京）」で始まる四首の道歌が並べられ、最末尾に「辻本源基久輯」という編者名が置かれて結ばれる。なお、本書には丁付けが見られるが、本稿での数え方とは方法が異なる。

次に翻刻を掲出する。翻刻は本文に相当する道歌部分のみを対象とする。また、翻刻に際しては通行の字体に改めたが、仮名遣いや清濁はもとのままとし、濁音で解すべき仮名についてはその右傍に（ ）を付して示した。なお、道歌の冒頭部分には歌順による歌番号を算用数字で示した。

#### 【翻刻】

- 1 い 一生を富貴にくらしその上にまた極楽へゆきたがるとは
- 2 ろ 六根に作るさいくわの塵ほこり死出の山路のたかねとぞなる
- 3 は 廿より三十四五にいたるまで折々悪ひしあん出るもの
- 4 に にくまれず柔和に世をは渡れかし福の神見よいつものにこく
- 5 ほ 仏だにぢやう業のがれたまわねばはやく因果のむくふさいわひ
- 6 へ へつらはず奢る事なく争そはず欲をはなれて義理を案ぜよ
- 7 と 泥水もおどめてつかへ人ごゝろすませばきよきよとの清水
- 8 ち 近づきは智者と福者と医者にて常に何かの用事あるもの
- 9 り 理悲をわけ国を守護して身を正したみを救ふを儒道とはいふ
- 10 め 盗人と生れつく身はなけれどもはしめはいろと酒とばくあき
- 11 る 流浪する人を見るにも我を主知れしめは親にそむくゆゑなり
- 12 を 起もせず寝もせで物を思ふこそ心の鬼の身をぞせめける
- 13 わ 若きとて血氣にまかせかりそめに喧嘩こうろん深くたしなめ
- 14 か 堪忍のなるかんにんがかんにんかならぬかんにんするが堪忍

- 15 よ 世の中に子にわるものはなかれども悪く育てゝわるものにす  
 16 た 他を恵み我をわすれて物事に慈悲ある人を仁と知るべし  
 17 れ 礼義をば程々にせよ足らされば無れいとなるぞすぎばついし  
 やう  
 18 そ つとせよひとの心は井戸の水かきまはすればすべてどろみづ  
 19 つ の国のなにはの事の善悪も只われからのことに有けり  
 20 ね 念仏はまふさずとても善心になさけや慈悲を仏道といふ  
 21 な 何事もころ一つにはからふな主と親との下知にしたがへ  
 22 ら 楽々と心にてこそかのきしにわたるもやすきのりの舟人  
 23 む 無学でも親がきびしく育つればしぜんとをやを大切にす  
 24 う 生れつく我悪念をなをさずに学問すれば身をがいすもの  
 25 る 一心にまことの道にいるひとのその行末は子孫はんじやう  
 26 の 法の身の月が身を照せとも無明の雲の見せぬなりけり  
 27 お 恩のためすする命はおしからず外の事にはいのちすするな  
 28 く 艸の葉のはどくにおく露の玉をもきはおつる人の世の中  
 29 や 焼捨てゝ灰になりなば何ものかのこりて苦をばうけんとぞ思  
 30 ま 丸くとも一角あれやひとこゝろあまりまるきはころびやすけ  
 31 け 稽古せよこの世ばかりか末の世の孫子迄にものこる筆あと  
 32 ふ 仏性は四大和合の躰なるに五欲のちりをいかゞひきけん  
 33 こ 極楽も地ごくも今の世にありて鬼も仏もこゝろよりなる  
 34 え 益ならぬひとの噂をするよりもまことの道をかたれ世の人  
 35 て 手にとりて浮世の世話をする墨は薄かれこかれくろうなりけ  
 り  
 あ 明日といふ事さへ知れぬいのちにて欲にあかざることぞはか

- 37 さ なき 酒の気をかりて出かける愚かもの酔かさむればそゝろ身か  
 たつ  
 38 き 金銀は慈悲となさけと義理と礼身の一代につかふためなり  
 ゆ 夢の世じや済のすまぬのいはずしてかんにんふくろ口をあけ  
 るな  
 39 るな 名聞を離れて兎角かんにんを深くつゝしめほとけとやいふ  
 40 め 皆人のとんじん愚痴の悪水は三途の川のながれとそなる  
 41 み 親類の義理も忘れて貪欲に争ふ人は犬もとうぜん  
 42 し 絵にうつし木に刻めるも弥陀はみたかゝすぎまぬみだはい  
 43 ぶくぞ  
 44 ひ 一声の郭公よりきゝたきは誠のみちをかたる世のひと  
 45 も もの参りするとも心まがりなば利生はあらでばちやあたらん  
 46 せ 銭金を遣ひ果すもたわけもの喰はずにためる人もばかも  
 47 す 姿こそみにくきとてもひとこゝろうつさばよきにうつらざら  
 めや  
 48 きやうかいの道ををしゆる和歌のとく能わきまへてぜんあく  
 を知れ

辻本源基久輯

## 二 『一休和尚いろは歌』解題

前述したように、多くの一休仮託道歌集を集成した画期的な書に『一休道歌 三十一文字の法の歌』（禅文化研究所・平成9年）がある。今試みに『一休和尚いろは歌』所収四十八首（挿絵歌五首を除く）について、『一休道歌 三十一文字の法の歌』に収録された道歌であるか否かを検索すると都合十六首が他の一休道歌集に見られることがわかる。具体的に『一休和尚いろは歌』の歌番号を掲げて、その道歌が

他のどの道歌集に採られているかについて次に示す。他集に見られない道歌については「他集所見なし」とする。なお、挿絵歌五首については他集に所見がないことを予め報告しておく。

## 【他集収録一覧】

- 1 他集所見なし
- 2 『一休和尚往生道歌百首』 71番歌
- 3 他集所見なし
- 4 他集所見なし
- 5 『一休和尚往生道歌百首』 26番歌
- 6 他集所見なし
- 7 『一休蟬川続編狂歌問答』 36番歌
- 8 『一休蟬川続編狂歌問答』 22番歌
- 9 他集所見なし
- 10 他集所見なし
- 11 他集所見なし
- 12 他集所見なし
- 13 『田舎一休狂歌』 8番歌
- 14 他集所見なし
- 15 他集所見なし
- 16 他集所見なし
- 17 他集所見なし
- 18 『一休蟬川続編狂歌問答』 35番歌
- 19 他集所見なし
- 20 他集所見なし
- 21 他集所見なし
- 22 『一休和尚法語』 42番歌

- 23 他集所見なし
- 24 『一休蟬川続編狂歌問答』 10番歌
- 25 『一休和尚往生道歌百首』 7番歌
- 26 他集所見なし
- 27 『一休蟬川続編狂歌問答』 25番歌
- 28 他集所見なし
- 29 『一休和尚法語』 49番歌
- 30 他集所見なし
- 31 他集所見なし
- 32 『一休和尚往生道歌百首』 82番歌
- 33 他集所見なし
- 34 他集所見なし
- 35 他集所見なし
- 36 他集所見なし
- 37 他集所見なし
- 38 『一休蟬川狂歌問答』 5番歌
- 39 他集所見なし
- 40 『一休蟬川続編狂歌問答』 39番歌
- 41 『一休和尚往生道歌百首』 69番歌
- 42 他集所見なし
- 43 『田舎一休狂歌』 2番歌
- 44 他集所見なし
- 45 他集所見なし
- 46 他集所見なし
- 47 他集所見なし
- 48 他集所見なし

以上をまとめると、『一休和尚いろは歌』の道歌四十八首のうち他集に所見のない歌は三十二首、他集にも収録される道歌は十六首である。その十六首のうち、『一休蟻川続編狂歌問答』と重複する道歌が六首、『一休和尚往生道歌百首』と重複する道歌は五首、『田舎一休狂歌』と『一休和尚法語』と重なる道歌が各二首ずつ、『一休蟻川狂歌問答』との重複が一首となる。すなわち、『一休和尚いろは歌』にはこれまで知られていなかった一休仮託の道歌が三十二首も出現したことで貴重である。

しかし、ここで改めて考えなければならない事実がある。それは筆者の手にある瓦版一枚摺りの資料三部である。それぞれの右端に「一休狂歌問答初編」「一休狂歌問答式編」「一休狂哥問答三編」という外題が見える。これらは大坂(阪)心斎橋馬喰町の書肆塩屋喜兵衛版の瓦版で、後に一枚摺りの瓦版を貼り合わせて『浪花みやげ』という外題の冊子本を販売したことで知られる。これら三枚の瓦版資料の内容は、いわゆる一休と蟻川新右衛門の狂歌問答の集成である。この二人の狂歌問答と銘打った書物は熱心な読者に支えられたようで、多くの版を重ねたことで著名である。その中には『一休道歌 三十一文字の法の歌』に収録された『一休蟻川狂歌問答』や『一休蟻川続編狂歌問答』もあるが、この二書以外にも狂歌の出入りのある諸本が存在している。ここでの狂歌はその性格から言って道歌と変わりがないので、以下道歌と呼ぶことにする。ところで、一休と蟻川新右衛門の狂歌問答を収録する諸本の中には、板本の冊子本もあり、一枚摺りの瓦版もある。そして、前掲の瓦版以外にも複数の架蔵本があるが、それらを検討していくといくつかの系統に分類できるようである。本稿ではそれらを詳細に論述する余裕を持たないが、いずれにしてもおびただしい数の一休仮託道歌が一休と蟻川の狂歌問答を収録する諸本から集成できるはずである。ここでは先の三枚の瓦版に限定して論じる。

「一休狂歌問答初編」「一休狂歌問答式編」「一休狂哥問答三編」には、それぞれ十六首ずつの一休詠とされる狂歌(道歌)が収録されている。以下に掲出する。

○行先のやどをそこぞとおもはねばふみまよふべき道はなきかな  
○ひとり来てひとりでかへる道あるかふたすぢかへる道をおしへん  
○金もちとあさばんすつるはひふきはたまるほどなほきたないとし  
れ(☆)

○かねもちを十人よせてよく見れば中に五人はむがくもんもう  
○両がんはあきらかなれどかなしきは女に目なき人もあるなり  
○父母につかふあふぎのかなめから次第くすゑひろなる  
○あの人はべんけいよりはつよいとはかんにんつよき人をいふなり  
(☆)

○世の人がじやけんをぬいでかたるともわがれうけんのさやへおさめよ(☆)

○けつこうな人といわるゝ人ならばてひどくつかへかゝるわが子を  
(☆)

○おそろべし鍵先よりも舌のさきゑてはわが身をつきくづす也(☆)  
○世の中をなんのへちまとおもへ共ぶらりとなるとくらされはせぬ  
○けいせいがあちらむくとではらたつなこちらむいたら城がかたむく(☆)

○けさころも有がたそふにみゆれどもこれはぞく家の他力本ぐわん  
○さとりなばぼうづになるなさかなくへぢごくへいつて鬼にまけるな  
○仲人はむかしのことよ今の世はへつついよりもさきへ女房(☆)  
○世の中におそろし物はなけれどもやねのものとはかとしやくせん(☆)  
(以上、初編)

○召つかふ年季ものをばいたわりててひどくつかへかゝるわが子を(☆)  
○灸すへてのちの病はなほせどもこたへかねたる今のかわきり(☆)

- るろうして世をすぎかねる其時はちかしき人もとほざかるなり  
(☆)
- 毒といふどくのなかにもきのどくぞこれより外の大どくはない  
(☆)
- 世の人はたゞはたらくにしくはなしながるゝ水のくさらぬを見よ  
(☆)
- あつまりて百まんべんの大さわぎうわきねぶつのこへの高さよ  
(☆)
- 後生をばねがひ過るもいらぬものもしごくらくへ通りすぎたら  
(☆)
- 追善にあふた仏もぼん店へまいねんくればうかむまはない  
(☆)
- しやかといふいたづらものが世にいでゝ多くの人をまよはせるかな  
(☆)
- 神仏むかふにあるとこゝろえてわがたましいにあるを知らずよ  
(☆)
- 十月に十がふらぬとたがいふた時雨とかいてしうとよむ也(☆)
- 人のまたくゞつてはぢぬかしこさに智者のかゞみと今にほめられ  
(☆)
- 極楽を西にあるとはいつわりよみな身にあるをしらぬおろかよ  
(☆)
- さじとりて人のやまひはなほせどもわが病ひにはこまるゐしやど  
の(☆)
- 世の中のよめがしうとになるなればまた仏にもなるはほどなし  
(☆)
- ふめたゝらたゝらふめくふめたゝらせいさへだせば金はわきも  
の(☆)
- 地ごくとはむねにしんくのやせがまんみな内しやうは火のくるま  
(以上、武編)

- なり(☆)
- かりたものかへさぬくせにゑんまづらあいそつかして用はそれぎ  
り(☆)
- 孝しろと人のおしへをもちひなば神やほとけのかごやあるらん  
(☆)
- わが子をばよいとてほめる親のぐちほめそこなひがおほくあるも  
の(☆)
- 浮世をばたゞうかくとくらすなりかねと衣をたしなんでおけ  
(☆)
- 朝がほのたつた一ト夜をちとせなるまつのよわひのおかしかりけ  
り(☆)
- 目に見てものみくふことがならざれば此世からしてがきどうとい  
ふ(☆)
- 銭かねはつかひすてるもたわけものくわずにためる人もばかもの  
(☆)
- 世の中はこゝろやばせとはゆれどもせゞがなくてはわたられもせ  
ず(☆)
- よいことはきひたり見たりあしき事見ざるきかざるいはざるぞよ  
き(☆)
- 商ひのみにかしこき子をもてばこれが内での子づちなるべし  
(☆)
- 女房はべんざいてんとうつくしい美人といふもかりのことなり  
(☆)
- 正直な人のかうべのすくなくばあまたの神に宿なしもある(☆)
- 木に竹のむりをいふともそこがおやいわせておけやたがわらふと  
も(☆)
- 十二調かみにつゝみてまくよりもわづかのかりをはらひたまへや  
(☆)

○世の中はひんじやと一じや二じや樂じや何じやかじやとて末はも  
ちやくちや

(以上、三編)

以上の四十八首の道歌のうち、(☆)を付した三十五首までが『一休道歌 三十一文字の法の歌』に収録されない、すなわち他書に見られない一休仮託道歌であることが指摘できる。ちなみに他の一休仮託道歌集に見られる道歌十三首を出典別に整理しておく、もっとも多いのはやはり『一休蟻川狂歌問答』の六例となる。次いで『一休諸国物語図会拾遺』の三例、『一休水鏡』の二例と続き、『一休骸骨』『一休咄』『一休諸国物語』『一休諸国物語図会』の各一例となる。ここで合計十五例となるのは十三首のうち、初編の「ひとり来てひとりかへる道あるかふたすぢかへる道をおしへん」が『一休咄』と『一休蟻川狂歌問答』に、また式編の「しやかといふいたづらものが世にいで、多くの人をまよはせるかな」が『一休水鏡』と『一休諸国物語』にそれぞれ重複して採られていることによる。

このように世に流布している一休仮託道歌には、『一休道歌 三十一文字の法の歌』に未収録のものが数多く存在していることを改めて確認しておかなければならないのである。

#### おわりに

以上、本稿では一休に仮託された道歌集のひとつで従来顧みられることのなかった『一休和尚いろは歌』を紹介し、その資料的な位置付けを行った。そして併せて、一休に仮託された道歌がまだ数多く埋没している現状の一端を指摘した。今後、数多く版行された一休と蟻川の狂歌問答を収録する諸本などを精査することによって、さらなる一休仮託道歌を発掘し、集成することの必要性を述べて稿を結ぶこと

とする。

#### 注

- (1) 詳細については拙稿『浪花みやげの世界』(『日本アジア言語文化研究』第九号〈平成14年10月〉)、『ことは遊びの世界』(『新典社・平成17年』所収)参照。
- (2) 本稿では蟻川新右衛門詠とされる道歌についての翻刻は省略した。
- (3) この歌は『多聞院日記』『遠近草』『新撰狂歌集』『新旧狂歌俳諧聞書』『物類称呼』などに見られる著名な狂歌であるが、他書に一休作という伝承はない。瓦版作者が著名な狂歌を一休の作に仮託したのであろう。ちなみに瓦版でこの歌の間に当たる蟻川の歌「霜月に霜のふるのもことわりよなせ十月に十はふらざる」(翻刻は省略)も、これと一対で伝承された著名な狂歌である。
- (4) このうち三編の一例「世の中はひんじやと一じや二じや樂じや何じやかじやとて末はもちやくちや」は、『一休蟻川狂歌問答』には蟻川の歌として「世の中は貧者有徳者苦者楽者なん者かじやとて末はむしやくしや」の本文で見える。

## A Study on “Ikkyu-osyou Irohauta (一休和尚いろは歌)”

ONO Mitsuyasu

*Course of Japanese and Asian Languages and Cultures,  
Culture Studies, Department of Arts and Sciences  
Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582-8582, Japan*

Ikkyu was a Zen priest who lived in Kyoto at the Muromachi era. Irohauta was a instructive song for the common people. There are a lot of unknown materials about instructive songs. “Ikkyu-osyou Irohauta(一休和尚いろは歌)” is one of this.

This report is the basic research of “Ikkyu-osyou Irohauta(一休和尚いろは歌).”

**Key Words:** literature, instructive songs, Ikkyu, Irohauta,  
“Ikkyu-osyou Irohauta (一休和尚いろは歌)”